

NEWダンガンロンパV2 絶望のコロシアムホテルツアー

肘鉄

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

集められた14人の超高校級の生徒達

モノクマによって新たなコロシアムが始まった

「超高校級の幸運」である阿笠隼は生き残ることが出来るのか？

※一人だけダンガンロンパV3の人物が登場します

創作論破初挑戦です

目 次

プロローグ	1
プロローグ2 ようこそホテルモノクマへ	3
プロローグ3 ミセシメ	9
登場人物	15

プログ

とある少年が撮影機材の前に佇んでいた。

長身に黄緑色のウェーブヘア、そして多数のピアスやネックレスなどを身につけた少年。所謂「チャラい」とでも言うべき見た目の彼だが、その表情におちやらけた様子は欠片もない。

「じゃあ準備はいいかな？ドッキドキの撮影夕々イム！」
何処からか現れた白と黒の獣がその特徴的な声で叫ぶ。準備など
とつぐにできている。

卷之三

「言葉を絶つて、この出来事に想ひを馳せる。」

これまでの狂二た
狂二でしまった出来事に

皆が口を揃えて「お前は幸運だ」などとのたまう。

そもそもそうか。宝くじに当選したり電車の脱線事故から五体満足で生還したりしていればそもそも見えるだろう。だけど、幸運が幸福に結び付くとは限らない。

何の後遺症にも苦しんでいなくてもあの事故で味わつた恐怖は消えないし、心を病んだ遺族から八つ当たりに等しい手紙や電話はひつきりなしにくる。生活費の心配は無くなつたが、両親は人が変わり会つたこともないような親戚は数えきれないほど連絡を寄越していく。

そんな俺の「幸運」も、とある奴らにとつては才能と呼べるらしい。俺の元にはあの希望ヶ峰学園から超高校級の幸運としてスカウトの話が来ていた。

あの学園に集まる奴らなら、俺のこの才能をどうにかしてくれるかもしれない。そんな淡い期待を抱いて俺は希望ヶ峰学園の前に立つた。

筈だつた。

(ど、)だよ……こ、(は)

先ほどまでは確かに希望ヶ峰学園の校門前にいた。だがしかし目の前に広がるのはやや薄暗い廊下。高級そうな敷物がしてあるとはいえ、こんな床に寝転がつていたなど不自然すぎる。

「あれ、まだ人が居る」

不可解な状況を訝しんでいると突然背後から声がした。

「なんだ……あんた」

「…まあ警戒するよね普通。僕は^{あさまちうじょう}癌街後生、多分君と同じ境遇だよ」
やや陰を感じさせる雰囲気の少年は癌街、と名乗った。

「多分同じってことはあんたも何故ここにいるのかわからないのか？」

「そう、まさにその通りだよ」

少年は驚いたとばかりに掌を出す。

「まだ人が居る……つてことは俺達の他にも存在してるんだな」

「あれ、せつかく説明しようと思つたのに……。まあいいや、それも正解。皆で他に人がいないか探してるところなんだ。そろそろ集合の時間だから君も来る?」

「ああ……そうさせてもらう」

トントン拍子に進む話を疑いながらもそれ以外に選択肢はありそうにない。癌街と共に俺は歩き出した。

これからどんなことが起きるか、その覚悟もせずに。

プロローグ2 ようこそホテルモノクマへ

所々にモニターや監視カメラが設置された通路をぬけると、行き着いたのはロビーのような場所だった

「……ホテル？」

さつきまでは学園の前にいた筈なのだが。やはり不可解だ。

広い空間に並べられたテーブルと椅子、そして受付。暗くて外は見えないガラス張りの自動ドア。動く気配はないがよく見ると何かをぶつけたような傷がある。

「やつぱり気になるよねそれ」

「ああ……なんなんだあの傷」

「さつき言つた皆のうちの一人がね、壊して外に出られないかつてイスを投げつけたんだけど……結果は見ての通りだよ」

発想が乱暴過ぎやしないだろうか、その人物。

「おや、さつきは見なかつた顔つすね」

突然受付の横、どこかへ通じる廊下から声をかけられた。

「やあ天海くん、そつちはどうだつた？」

「ダメダメっす。何の収穫もなさそうなんで先に切り上げて帰つて来たんすよ」

「そうかあ……」

癌街は彼を知っているようで、驚く様子もなく会話を始める。彼はその喋り方や見た目からどこか軽薄な印象を与える人物だった。

「で、そちらの人は？」

「そういうえば僕もまだ聞いていなかつたね」

「俺は……阿笠 隼だ。よろしく」

阿笠 隼。それが俺の名前だ。

俺はこの名前が好きではない。生まれた時から似合わない名前を背負つているということが堪らなく苦痛だからだ。

「『隼』か。カッコいい名前つすね」

「なんだよ、皮肉か？」

「いや、そんなつもりはないっすよ。俺は天海蘭太郎。一応超高校級の冒険家っす」

唐突に出てきた『超高校級』という単語に一瞬たじろぐ。

「超高校級って……もしかしてあんた希望ヶ峰学園の生徒か？」

「あれ？ 痢街君から聞いてないんすか？」

「ああごめん、伝え忘れてたよ。ここに集まってる人は皆希望ヶ峰学園の生徒なんだ」

それは『つい』で済まされないとと思うのだが。

「そうだつたんだな」

「君もそななすよね？ それで、才能は何なんすか？」

「俺は……」

一瞬、言い淀む。

「俺は超高校級の幸運、らしい」

「ああ。あの抽選で決めるやつだね」

「……まあそなだな」

説明が面倒臭いのでそういうことにしておく。

「じゃあ痢街も何かしらの才能を持てるんだよな？ 聞いていいか？」

「僕？ 実は、何の才能を持つていたか忘れちゃったみたいなんだ。笑っちゃうよね」

「そななにあつけらかんとしてていいのか……」

痢街は特に気にする様子もなく答えた。嘘を言つている素振りもない。おそらく本当のことなのだろう。

そんな他愛もない会話をしているうちに、どんどん人が集まってきた。俺を含む14人がロビーに会する。話を聞く限り新しく合流したのは俺だけで、探索できる範囲ではこれで全員ということらしい。

「よし、では阿笠とやらの為にもう一度自己紹介しようではないか！」
私は鬼龍院 孝磨！ある教えを広めている！」

法衣を着た剃髪の男が高らかに叫んだ。やや呆れている周りの態度から鑑みるに、常にこのテンションのようだ。

そして鬼龍院を皮切りに他の者たちも次々と口を開いた。

「日比野 憲明。ユースチームでサッカーやってんだわ。んな感じでよろ」

「アタシは宮本 アンジエリカだよ。居合道やつてるんだ。段位はまだ二段だけどね」

「頬白 善次だ。隣人トラブルで困つてるならこの名刺の番号にかけてくるといい」

「葉山 曜。整体師。以上」

「石動 信一郎。いずれ登山家としてこの名前を世界に轟かせる予定だ」

「篠宮 明です…。あの、小説を嗜んでます…」

「五十嵐 伊月です！私の矢は百発百中と言われてるんですよ！」

「…………」

「フフ……」

（なんなんだコイツらは……）

残り三人のうち二人は喋る気配が一向はない。見かねた最後の人物がやれやれといった表情で口を開いた。

「あく…その二人は色々事情がありまして。そちらの無口な女性は綾倉 莉乃さん。超高校級の歌手で喉を消耗品だと考えてるんだそうです」

「成る程だから声を発さない、と」

綾倉がコクリと頷く。意志疎通をするつもりは有るようだ。
「で、こちらの男性が草野 仁政さん。画家だそうです。一度創作について思考しだすと……」

「ンフフ……フフ」

「こうなるわけだな」

「残念ながら…」

「そして申し遅れました。私は星宮 観音^{ほしのみや みおん}。女優をさせていただいてます」

「……ああ、知ってる」

「そうでしたか。それは失礼しました」

星宮 観音と言えば知らない方が少ない程の大人気女優だ。

4歳から子役として芸能界に入り、その整った容姿からすぐにブレイク。代表作は数知れない。実をいうと俺もファンだつたりする。「芸名じやくて本名なんだな。俳優って皆芸名使つてるイメージだったから意外だ」

「子役から入る人は多くが本名なんです。……売れてもそのまま俳優になることができるのが少数というのが一番の理由でしょうね」

そう言つた彼女の表情は気苦労を感じさせた。

「皆ありがとう。よくわかつたよ」

全員分の挨拶が終了したので、礼を述べた。

「それにしてもアタシら何でこんな所に居るんだろう。皆も入学式の為に学園に居たんだよね？」

「入学式の前……わかつたぞ！入学前のレクリエーションだな！そうに違いない！」

「ないわ。だつたら床なんぞで寝てねえんじやね」

これが学園側の催しであることも思案したが、日比野の言うところではないだろう。

俺はともかく、彼等は超高校級の才能を持ち未来を期待されるいる存在だ。それをこんな乱雑に扱うとは考えにくい。

「そもそもここおかしいです！時計の類いが一切ありません！これじゃご飯の時間がわからなくなりますよ！」

「今は食事のこと考えてる場合じゃないと思いますよ五十嵐さん…」「取り敢えずここから出る方法を」

『やあーーーーーーーと全員揃つた!!遅くて待ちくたびれちゃつたよ
!!』

カン高くて・・それでいて不快な口調の大声が響いた。全員が音の元、つまりモニターに視線を注ぐ。

「…………は?」

そこに映っていたのはふざけたマスコットのようなヌイグルミだつた。白と黒半々の模様をした熊・・と表現すべきだろうか?それは間違なく俺たちに向けて話しかけていた。

『このままオマエラの呆けたバカ面鑑賞するのもいいけど、時間卷いてるからさつさと進めるよ!じゃレストランに集合ってことで!』
ヌイグルミが言い終わるとブツリと映像が途絶える。同時に俺と癌街がやつて来た通路とは反対に位置していた大扉から施錠が解かれる音がした。

「…………」

あまりに突然の出来事に皆が沈黙している。学園からホテルへの知らぬ間に移動。そして謎のヌイグルミ。こんな不可解すぎる状況を瞬時に飲み込める訳がないのだ。

そんな中一番に動き出したのは癌街だつた。

他の者も顔を見合せた後でそれに続く。

扉を開けた先は豪華、とまではいかないが中々にセレブな雰囲気の内装が施されたレストランだつた。

そして長大なテーブルの上に各々への宛名付きで薬のようなものが置いてある。その白い錠剤を手にとつて観察する。毒・・ではないさそうだ。

「害はないと思うけど最初に僕が飲んでみるよ」

「お、おい」

言うが早い癌街はすぐに赤い錠剤を飲み込んだ。

「ぐつ……」

「だ、大丈夫か!?」

「…………ああ、心配ないよ。ちょっと頭痛がしただけさ」

「毒なんか入つてないってば！」

奥の小さなテーブル。そこから先程の不快な声がした。

「お主いったい」

「あーもーそういう反応いいから。ボクのこととかオマエラの置かれてる状況はその薬を飲めば理解できるよ。癌街クンを見れば心配なってわかるでしょ？」

鬼龍院の問いは心底鬱陶しそうに遮られる。

「ホラ時間卷いてるつてさつきから言つてるでしょ！早く早く！」

本当に大丈夫なのか・・？

皆が手には取つてみたものの飲み込もうとはしない。

「言う通りにするしかなさそうつすね」

「さつすが天海クーン！理解が早い！」

・・覚悟を決めるしかなさそうだ。それ以外に選択しはないように思える。俺は恐る恐るその錠剤を口に入れた。瞬間、頭痛と共に幾つものワードが頭を駆け抜けていく。

支配人？コロシアアイ？学級裁判？クロ？卒業？

ああ、わかる。理解できる。・・いや、知つている？

まるで元から持つっていた知識のようにそれらの情報は頭に定着した。

「よーし皆飲んだね。じゃあ確認。ボクの名前は？！」

モノクマがイタズラっぽく質問してくる。

頭痛に頭を抱えながら俺はその言つてはいけないような・・・悪魔の名前を呟いた。

「モノ……クマ……」

プロローグ3 ミセシメ

「せいかくくい!!他のミンナもちゃんと理解できるみたいだね！」

「いや、でもコロシアイって」

「しょぼーん……信用してくれないんだね……これだけ工程を簡略化してあげてるのに……」

落ち込むモノクマだがこんなことをいきなり始められて信じられる訳がない。それは皆も同じようで、ほとんどが疑問符を掲げている。

「ま、良いもんね！そのためにコイツを準備させてるから。カモーンエグイサル!!」

モノクマが宣言するとレストラン入口の大扉が開かれる。そこからさっきまで影も形もなかつた一機のロボットがズカズカと入ってきた。

二足歩行で片方の腕には・・・

「き、機銃!?」

アンジエリカが恐怖にひきつった顔で叫ぶ。

「このホテルではボクが支配人。オマエラはそれに従つてればいいの！まだ信じられないヤツもいるみたいだし……」

「一人死んで貰おつかな」

モノクマが玩具のような赤いハンマーで目の前のボタンを叩くと、何処からか現れたルーレットが周りだす。

本気だ。何故かはわからないがそう思つた。コイツは本氣で俺達を・・・殺害するつもりだ。

回転が遅くなる。よく見るとルーレットにあしらわれているのは俺達を模した顔だ。

また回転が遅くなる。全員が固唾を飲んで見守る。

更に回転は遅くなる。そして針の役割を担つてているであろう点灯

表示が遂にその動きを止めた。

14つに分けられたうち光輝いているのは・・・

「お……れえ？」

天海だつた。

「ミセシメは天海クンにけつてーーい!! うっぷ、やつぱり不幸だねえ
キミは!」

「ふ、ふざけるな!! お前やつぱり最初から……!」

先程会つた時からは考えられない激昂具合で天海が大声をあげた。
「ふざけてなんかないよ? 意図的に決めるならわざわざキミを選んだ
りしないって。だからこれは間違いなく厳肅なるルーレットの結果
なんだよ」

「そん……な」

エグイサルが動き出す。その機銃が天海に向けられた。

「じゃ……いつてみようか」

「……あ……」

機銃が作動音をあげ始める。しかし天海は既に諦めたといわんばかりに動こうとしない。

「天海!!」

思わず声を張り上げる。同時に癌街がエグイサルに向けて走りだした。

(一體何を……!?)

そして機銃が斉射される瞬間、癌街はその華奢な身体つきからは考えられないスピードでエグイサルに接近し、機銃の銃口を蹴り上げた。

直後凄まじい勢いで弾丸が発射された。悲鳴と叫び声、そして銃声が飛び交う。弾丸が天井にぶつかり、跳弾でテーブルや椅子が碎けていく。破碎物の破片が飛び散る。

俺は伏せることしかできなかつた。そんな中、誰かに覆い被さられ

る。

斎射が終わり、エグイサルがその動きを止める頃には食堂は滅茶苦茶になつていた。やがて舞い上がつた埃が薄まつていき、視界が開けていく。

「皆さん！無事ですか!?」

散らかつたテーブルや置物のせいで皆の姿が確認できない中、まず始めに星宮が声をあげた。それから次々と無事を知らせる返答が続く。

「天海も生きておるぞ！怪我も大したことない！」

鬼龍院が天海の生存を確認したようだ。残るは・・・

「大丈夫か!?

俺を守る様に覆い被さつっていたのは癪街だった。

「痛つた……大丈夫だよ」

所々擦り傷があるものの、大怪我は負っていない。
「良かつた……」

本当に良かつた、と心からの安堵の声が漏れる。

「そつちこそ大丈夫?」

「ああ。お前のおかげでな。ありがとう」

「そんな表情もできるんだね」

「……うるさいな」

「アハハ、ずっとしかめつ面だつたからさ」「チツ……」

「うふふ」

「！」

全員がモノクマの声に反応して即座に緊張した空気を放つ。

「結果的に誰も死んでないけど、これで本気だつて信じてもらえたよね」

確かに信じるしかなかつた。モノクマは本気だ。あの威力の弾丸が命中していれば間違いなく天海の命は無かつただろう。

「エグイサルのテストもできだし、今回はこれでおしまい！こんな序盤から人数減らしちゃうと苦情来ちゃうしね。感謝してよオマエラ！」

「テスト？ 苦情？ 与えられた知識の中にはそれに該当するような項目はない。」

「あと癌街クン！ キミだから今回だけは見逃すけど、エグイサルへの故意の攻撃はルール違反だからね！」

エグイサルが何処かへ退散していく。どうやら本当にこれで終わりらしい。

「それぞれの個室に『モノクマフォン』を用意してるからちゃんとルールを確認しておいてね！ それじや、あでゅー！」

言い終わるとモノクマもスルリと物陰に消えた。
「たす……かつた……？」

放心していた天海が口を開く。

「生きてるよな？ なあ！ オレ生きてるよなあ！？」
「ぬお!? ど、どうしたのだ！」

天海は我を取り戻したかと思うと鬼龍院を問い合わせるように叫んだ。

「大丈夫、生きてますよ。まずは落ち着いてください」

星宮が仲裁に入った。他の者も自分より取り乱している天海の存在のせいか、あれだけの事が起こつたにも関わらずパニックにはつていらない。

「ハア…ハア…すいません。俺、ちょっと取り乱したみたいっす
天海はようやく落ち着いたようだ。

「殺されかけたのだ。気にするな」

「そうです！ 悪いのはあの横暴なヌイグルミです！ 個室もありますし天海殿には休息を進言します！ 脚を怪我されているようならお手伝

いしますので！」

「すいません、じゃあお願ひするつす……」

鬼龍院と五十嵐に支えられ、天海はレストランを出ていく。

「痣街、個室つて

「うん、受付横の通路、最初に天海くんがやつてきたところだね。その先に個室があるんだ」

俺以外は既に知っている情報だ。痣街から個室のことを聞いている間に他の者が次々と扉の向こうへ消えていった。皆、疲れきった表情をしている。

「……俺達も行くか」

「うわ、ちょっと」

痣街の肩に手を回して支える。この腫れて膨らんだ右足首では歩くのは困難だろう。

「気付かれてたかあ」

「あんな鉄の塊を思い切り蹴り上げればこうなる。それに……」

俺を庇つてできた傷もあるのだ。ある程度の責任は感じる。

「でもなんか……情けないな」

「お前のおかげで助かつた命があるんだ。胸を張つていいと思うぞ」

「その通りですよ痣街さん」

「星宮さん」

星宮も痣街に肩を貸す。

「あなたがあの行動を起こさなければ、天海さんの命は無かつたんですけどから」

「そうかな……そのせいで皆を危険に晒しちゃつたし」

「でも誰も死んでいません。結果良ければ全て良しです」

「そう……だね……」

一瞬、暗い表情を覗かせたが、それはすぐに隠された。

そしてその様子に、疑心で満ちた視線を送る人物がいたことに俺は気がつかなかつた。

やや長い通路を抜け個室の集まるフロアに出る。途中、幾つかの扉が有つたが、星宮によると開かないものが多いらしい。

「ありがとう一人とも。結局更に情けないことになつたけど」

「だから気にするなつて……」

部屋へ消える癪街を見送り、自らの個室を探す。

「えーと、天海……？ 鬼龍院……草野……？」

「右手側にはありませんよ。阿笠さんと私の個室は左手の奥です。お隣さんですね」

確認してみると確かにそこには自分の個室がある。ネームプレートにSD風の人物像。少々苛つくことにこれも良く出来ていてわかりやすい。

「左隣は星宮で右隣は……空き部屋？」

「ネームプレートもありませんし、最初から鍵が掛かっているんです。おそらく使用する予定のない部屋、なんでしようね」

こんな非日常的なことの為に用意された舞台にしてはテキトーだな。

「今は余計な事は気にせず休みましょう。おやすみなさい阿笠さん」「あっ、ああ。おやすみ」

ニコリと微笑んで星宮は部屋へと入つていった。不意に見せた笑顔に、屈辱だがドキリとさせられてしまう。

しかし直後に響いた施錠音が俺を現実に引き戻した。

そう、コロシアイはもう始まつているのだと。

登場人物

阿笠 隼

「まつたく幸運なんじやないさ」

超高校級の „幸運“

数度の大事故に巻き込まれながらも五体満足で生還・宝くじに当選する等の経歴を持つ

天海 蘭太郎

「俺は天海蘭太郎。よろしくツス」

超高校級の „冒險家“

ピアスやネックレスを多数身に付けた、軽薄な印象を受ける男性

星宮 観音

「枕営業なんかやつていません。本当ですよ？」

超高校級の „女優“

5才から子役として芸能界に入り、数々のヒット作で主演を務めて
いる

草野 仁政

「良い絵が描けそうだ……」

超高校級の „画家“

見た目通りの変わり者で受賞歴が一度しかないにも関わらず、その
圧倒的なセンスから巨匠達からのスカウトが絶えない

頬白 善次

「それ器物損壊罪です。なんなら法廷で争いますか」

超高校級の „弁論部“

弁護士の父と検事の母をもつ
口が上手い

殺生院 高麿

「これは神が我に与えたもうた試練なのだ！」

超高校級の“宗教家”

曾祖父の代から続く日本最大の宗教団体の長
幼いころから親の跡を継ぐべく育てられたためやや感覚がずれて
いる

日比野 先人

「つまり誰かをぶつ殺してバレなきゃ出られる訳だ」

超高校級の“サッカーボーイ”

ジュニア、Jr. ユース、ユースと順調に昇格してきたサッカーボーイ

リート

常に気だるげ

石動 信次郎

「山はいいぞ！ 色んな体験ができる！」

超高校級の“登山家”

小学生時に富士山を最も過酷なコースで登頂を達成

以後も海外も含む様々な高山に挑み、中学生にして既にスponサー
契約の話が出ていた

綾倉 莉乃

「…………」

超高校級の“歌手”

13歳でCDデビュー後、出すアルバム全てがオリコンのランキン
グ上位に乗り続けた魅惑の美声の持ち主

自分の喉を消耗品だと考えており喋ることを嫌う

五十嵐 伊月

「集中してますよー！チヨー集中してます！」

超高校級の『弓道部』

小学生から全国大会を連続優勝中で国際大会にも中学生ながら日本代表として選抜されたが本人が大会の存在そのものをど忘れしていたため参加していない

何かを射る時はまつたく喋らなくなる

宮本 アンジエリカ

「いやー、英語つて難しいね。あたし一生喋れないや」

超高校級の『居合道部』

イギリス人の母親と日本人の父親とのハーフ

日本生まれの日本育ちで『サムライ』に憧れている

葉山 曜

「礼は不要」

超高校級の『整体師』

彼女に体を整えてほしいと仕事の依頼が殺到し、予約は二年待ちとなっている

篠宮 明

「死ぬんだ……！私ここで死ぬんだ……！」

超高校級の『Web小説家』

自身のサイトにて小説を掲載している

癌街 後生

「どんな理由があつても人殺しなんてやる奴は皆クズさ」

超高校級の『??』

やや陰のある雰囲気の少年

何故か自身の才能を忘れている